

羽村市史編さんだより

令和4年10月

第31号

伸びゆくはむら

特集 縄文の祈りのかたち —土偶—

今号の内容

部会の手帖

資料紹介

市史編さんの足あと

コラム「ちっとなべえ」

特集

縄文の祈りのかたち — 土偶 —

皆さん、10月9日は何の日かご存じですか？

この日は、数字の語呂合わせ「10(ど)・9(ぐう)」から「土偶の日」なのだそうです。縄文時代につくられた土製の人形、「土偶^{ひとがた}」。はるか昔の人々が祭祀^{さいし}に用いていたものと考えられていますが、まだまだ謎が多く、様々な説があげられています。

今回の特集はこの土偶について紹介します。

◆ 土偶のイメージ？

「縄文のヴィーナス」「縄文の女神」という名前を聞いたことがあるでしょうか。この二つはほぼ完全な形がわかる土偶で、それぞれ国宝に指定されています。「土偶」というところから完全な形の像を思い浮かべるかもしれませんが、でも多くの土偶は違った形で見つかります。

◆ 土偶の意味とは

土偶については、その形や文様、出土状況の考察など多くの研究があり、呪術用とする説、病気や怪我を治すための身代わり説、守り神説などが考えられています。

全国的にたくさん土偶が出土していますが、完全な状態で見つかることは少なく、多くは体の一部が欠けた状態で発見されます。一つの遺跡から複数の破片が見つかったとしても、それらが同じ一体として接合することはほとんどありません。そのため、何らかの祭祀において意図的に一部を壊すことで、その役割を終えるのではないかと考えられています。

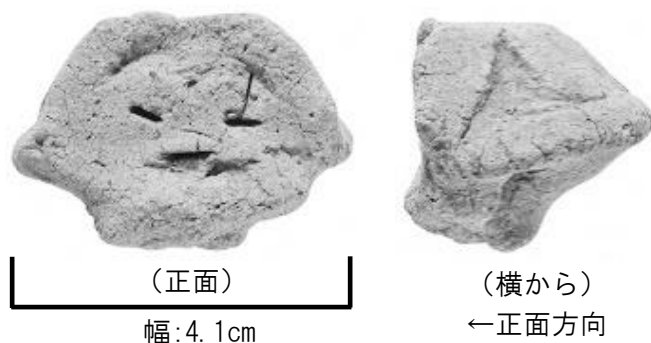
◆ 羽村で見つかった土偶

羽村市域の縄文時代遺跡でも土偶のかけらがみつかっています。

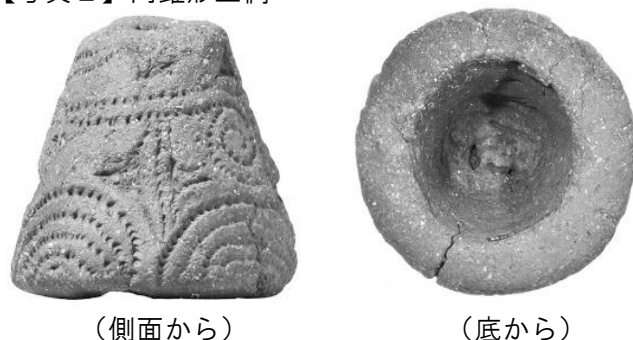
【写真1】は、羽村市域の羽ヶ田上遺跡^{はけたうえ}第7次調査（平成30年）で発見された土偶の頭部です。正面には目と口が表現され、横から見ると頭頂部と顔面が平坦な形になっています。素朴で可愛い表情を見ていると、思わず笑みがこぼれます。

同じ羽ヶ田上遺跡から見つかった【写真2】は、胴部と考えられています。底部はなく、中が空洞の円錐状で高さは5.6cmです。上半分には渦巻、下半分には弧を重ねて描くように細かい模様【図1】が付けられています。円錐の頂点部は平らで、熱を受けていない部分があることから頭が付いていたようです。

▼【写真1】土偶頭部



▼【写真2】円錐形土偶



▼【図1】円錐形土偶の展開図



【写真3】は、山根坂上遺跡で見つかった土偶で、女性の胴部と考えられています。正面から側面、脇腹あたりから背にかけて連続して文様が描かれています。頭や手足は不明ですが、割れ口があることから、完全な形ではないことがわかります。



▲ ▶ 【写真3】
背面人体文土偶



【写真3】のように、土偶は女性像が多く、妊娠・出産・子育ての場面の表現もあることから、地母神^{ちぼしん}信仰の女神像、豊穡の祈り、安産祈願、子どもの健康を願うためのものでは、という説があります。

医療等の環境が整った現代であっても、出産には不安な気持ちが伴います。縄文時代の出産を考えてみれば、母子共に危険と隣り合わせだったに違いありません。「子どもが無事に生まれますように」「元気に育ってくれますように」という願いは昔も今も変わらないものだと感じます。

1 万年以上も続いた縄文時代、土偶には複数の意味がありそうです。どんな思いでつくられたものなのか、土偶は縄文人の心を考えるうえで重要なものといえます。羽村の縄文時代の土偶にはどのような願いが込められていたのか、思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

※ 写真1～3：羽村市郷土博物館所蔵

※ 図1：羽ヶ田上遺跡第7次調査報告書

編さん室長の

ワンポイント 講座



今回の「土偶」とは別に、博物館やテレビ等で「埴輪^{はにわ}」を見たことのある方も多いでしょう。皆さんの疑問に先回りして解説します。

「土偶」と「埴輪」って何が違うの？

ポイント1 作られた時代が違います

土偶が作られたのは縄文時代で、今から1万3000年～2400年前頃と言われています。埴輪は古墳時代(4世紀～6世紀頃)なので、土偶の方が埴輪よりずっと古いものなんです！



ポイント2 発掘された場所に特徴あり

土偶は、住居内部や祭祀場と考えられる広場・穴など、人々が暮らしていた集落から見つかることが多いです。一方の埴輪は、権力者の

墓である古墳の周りに並んだ形で見つかっています。これは、埴輪が死者を弔う役割を担っていたためだと考えられています。



ポイント3 形(モデル)が違います

本文の通り土偶は人形ですが、埴輪^{ひとがた}は人形以外に、鶏・犬・猪・馬などの動物、家や船、刀や盾等の道具のものもみつかっています。丸い筒状の形をした円筒埴輪^{えんとう}は、古墳の周囲に並べられ、聖域を囲っていたと考えられています。

また、人物埴輪には男性も女性もあり、服装表現も豊かで、儀式の様子を再現したと考えられる配置で発見されたこともあります。

ポイント4 大きさが違います

土偶は大きさ10cm程度のものが多く、現存するものでは最大45cmです。一方、埴輪は古墳の規模に比例して様々な大きさがあり、国宝の挂甲武人埴輪^{けいこうぶじん}は1.3m、最大の円筒埴輪にいたっては約2.5mもの巨大さです。

部会の手帖



今回の「部会の手帖」では、令和5年度の羽村市史本編（上巻）の刊行に向けて、この夏から秋にかけて開催した部会合同会議等について紹介します。

上巻担当部会による合同会議

（令和4年7月10日開催）

羽村市史本編（上巻）を担当する三つの部会（考古・中世、近世、自然）から、執筆を担当する部会員等が集まり、進捗状況の報告及び部会間での情報交換を行いました。

異なる分野の記述を一冊の本にまとめるために、会議終了後も部会員同士で活発な意見交換が行われました。

市史編さん部会長会議

（令和4年9月21日開催）

市史編さんに関わる五つの部会の部会長が集まり、7月の合同会議で出された意見を踏まえて協議を行いました。

上巻の全体に関わる事項だけでなく、個別の懸案事項の調整や刊行までのスケジュール等について確認しました。

「伸びゆくはむら」バックナンバーについて

以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室（市役所西庁舎3階）
- 羽村市図書館（3階地域資料コーナー）

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは
コチラから



表紙の解説

緑の木々とどんぐり

写真はグリーントリム公園で撮影したどんぐりです。

秋が深まると、子どもころ、地面に落ちたどんぐりを集めるためにあちこちの森や林を歩き回ったことが思い出されます。

近年の研究では縄文人が巧みに植物を利用していたことが分かってきました。今と同じく秋は実りの季節、縄文人はトチノミ、クリなどの堅果類を採り、加工・保存をしていたようです。

今回は『羽村市史 資料編 自然』から取りあげました。

「図 14-7 羽村市内の雑木林を構成する主な高木種」

(『羽村市史 資料編 自然』312 ページ)

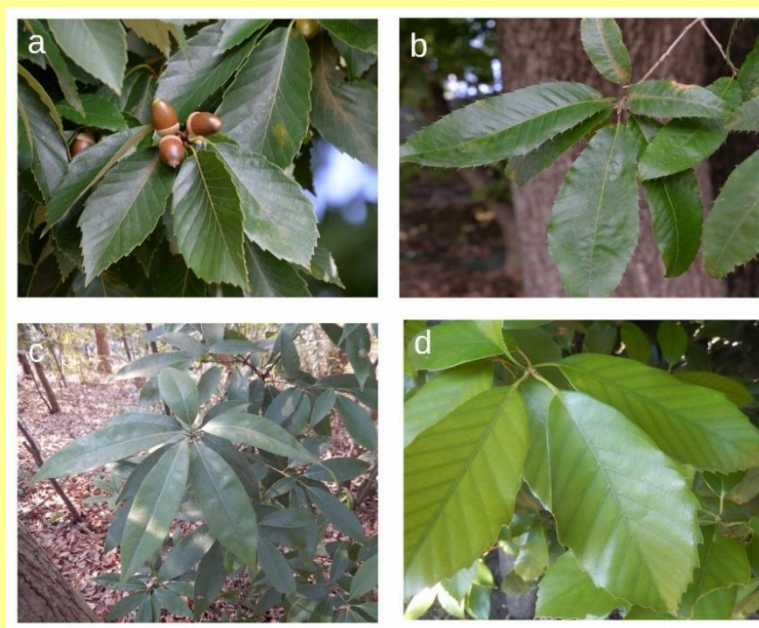


図 14-7 (a) コナラ (2017 年 10 月 8 日撮影)、(b) クヌギ (2017 年 10 月 8 日撮影)、
(c) シラカシ (2015 年 3 月 14 日撮影)、(d) アラカシ (2018 年 6 月 3 日撮影)

これらの写真は、2015～2018年の間に羽村市内で撮影されたブナ科の樹木です。

市史の調査では、小作緑地公園と緑ヶ丘憩いの森まいぼくで毎木調査を実施しました。毎木調査とは、一定の調査区を設けて、その範囲内にある樹木の種名や樹高、胸高直径（根元から人の胸の高さ、およそ1.2mあたりの直径）、位置等を記録する調査のことです。

樹高1.5m以上の樹木を対象に調査した結果、小作緑地公園にある樹高10m以上の樹木は、そのほとんどがコナラであることがわかりました。ここには樹高10m以下のものは少なく、5mより低いものは1本もありませんでした。また、樹高10m以下の樹木については多くがシラカシとアラカシでした。

緑ヶ丘憩いの森でも、小作緑地公園と同様に高木の多くはコナラとクヌギでした。しかし、小作緑地公園と違ってシラカシとアラカシが1本もなく、樹木が比較的少ないこともあって、林内の見通しがよいのが特徴的でした。

今回調査した公園はともに、かつては薪炭林しんたんりん

として利用されていましたが、その利用がなくなったころから林の様子が変化し、大木へと成長したコナラやクヌギが目立つようになります。今後、小作緑地公園では、現在多くを占めている落葉広葉樹に代わって、シラカシやアラカシなどの常緑広葉樹が増えていくと考えられます。一方で、シラカシやアラカシのない緑ヶ丘憩いの森は、後継となる樹木が少ないために、今後どのような森林になっていくのかを予測するのは難しそうです。

近年、多摩地域ではカシノナガキクイムシが媒介する「ナラ菌」による樹木（ブナ科）の枯死被害の拡大が話題となっています。樹木の枯死は残念なことです、その影響で林の中が明るくなれば、地上に落ちたどんぐりから新しい芽が出て、ゆくゆくは次世代として後を継ぐ樹木が育つきっかけになるとも考えられます。

10月を過ぎると、林の中には写真のようなどんぐりがたくさん落ち、紅葉した葉が落ちて地面を覆うと、コナラやクヌギは冬へと向かう準備に入ります。



市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
7月	7日(木)	①遺跡現場見学 (以降、定期的に作業進捗の確認)
	10日(日)	上巻担当部会による合同会議
	12日(火)	②③⑤資料クリーニング作業 (郷土博物館)
	13日(水)	⑤年中行事調査(盆行事)
	14日(木)	③⑤資料クリーニング作業 (郷土博物館)
	16日(土)	⑤年中行事調査(盆行事)
	19日(火)	②資料調査 (以降、定期的に実施)
	23日(土)	②資料調査(郷土博物館)
8月	2日(火)	⑤民俗部会オンライン会議
	4日(木)	③近現代部会オンライン会議

月	日	できごと
9月	11日(木)	②資料調査(郷土博物館)
	18日(木)	③⑤資料調査(郷土博物館)
	27日(土)	②資料調査(福生市郷土資料室)
	1日(木)	⑤市内巡検
	2日(金)	⑤個人宅調査 および 民俗部会会議
	4日(日)	②近世部会会議
	10日(土)	⑤年中行事調査(十五夜)
	13日(火)	③近現代部会オンライン会議
9月	21日(水)	部会長オンライン会議
	29日(木)	②資料調査(郷土博物館) ③資料調査(ゆとりぎ・図書館)

コラム

ちっとなべえ

第31回「紙のはなし」

わたしたちの暮らしに欠かせない「紙」。

市史編さん室で扱う資料には紙でできたものがとても多いのですが、それらの手触りや質感、微妙な色の違いに気づくことがあります。

普段使っている洋紙に対して、日本では昔から和紙が使われてきました。その和紙の中にも種類があり、例えば書きものをするときによく用いられる紙は料紙^{りょうし}です。その代表的なものには楮紙^{ちよし}、斐紙^{ひし}(雁皮紙^{がん})、三桮紙^{みつまたし}などがあり、いずれも植物を原料としています。それぞれに特徴があり、楮紙は繊維が粗く厚みがあって丈夫です。また、斐紙は光沢があり、触るとパリパリと音がします。手に入りにくい斐紙の代わりに使われた三桮紙は、ミツマタの木の

繊維から作られていて、なめらかな手触りで斐紙と同じくパリパリと音がします。

紙といえば水に弱かったり、簡単に破れたり、とても脆い^{もろ}ものに思われがちですが、今回紹介した和紙は数百年前の資料として遺^{のこ}されているものもあって、実はとても丈夫で長持ちなことに気づかれます。もしかしたらみなさんの身近にある紙も、何十年、何百年後に誰かが手にしているかもしれませんね。



▲ミツマタの花



▲明治時代の受取証の束

※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちよっと、少しばかり」という意味です。